

メルロ＝ポンティ・サークル
第26回研究大会プログラム
2020年9月5日(土) 9月6日(日)

第一日

日時 2020年9月5日(土)

会場 Zoom

12:50 開会の挨拶

個人発表

- | | | |
|-------------|--|---------|
| 13:00-13:45 | 常深新平 (慶應義塾大学)
メルロ＝ポンティにおける絵画の歴史性――「生きられた世界」との関係を巡って | 司会 山下尚一 |
| 13:45-14:30 | 柳瀬大輝 (東京大学)
後期メルロ＝ポンティにおける超弁証法の問題について | 司会 加國尚志 |
| | 休憩 | |
| 14:45-15:30 | 山本りりこ (聖心女子大学)
ジュール・ラニョー「知覚についての講義」にみる視覚における”予見”の機能 | 司会 本郷均 |
| 15:30-16:15 | 田村正資 (東京大学)
空間の実存的特徴――1953年講義『感性的世界と表現の世界』から | 司会 家高洋 |
| 16:15-17:00 | 砂子岳彦 (常葉大学)
メルロ＝ポンティ存在論の自然化:「存在論的波動」をめぐって | 司会 廣瀬浩司 |

第二日

日時 2020年9月6日(日)

会場 Zoom

個人発表

- | | | |
|-------------|------------------------------------|--------|
| 13:00-13:45 | 渡辺亮 (名古屋大学)
視覚に於ける、世界内存在の個性性の成立 | 司会 本郷均 |
| 13:45-14:30 | 橋爪恵子 (東京大学)
メルロ=ポンティにおける文学の位置づけ | 司会 本郷均 |

14:30-14:50 ビジネスミーティング

シンポジウム

メルロ=ポンティと発達心理学・教育学

- | | | |
|-------------|--|---------|
| 15:00-15:30 | 酒井麻依子 (筑波大学)
「人間の科学」とメルロ=ポンティの哲学 | 司会 澤田哲生 |
| 15:30-16:00 | 奥井 遼 (同志社大学)
わざの習得とコミュニケーション
休憩 | |
| 16:15-16:45 | 山口真美 (中央大学)
Pre-constancy vision in infants——乳児の視覚世界の謎に迫る | |
| 16:45-17:45 | 全体討論 | |

シンポジウム

メルロ=ポンティと発達心理学・教育学

趣旨：

『知覚の現象学』（1945年）から数年後、一般に彼の中期と呼ばれる時期に、メルロ=ポンティはパリ大学文学部で児童心理学・教育学の講座を担当している。そこで彼が行なった講義、通称「ソルボンヌ講義」（1949～1952年）は、当時の様々な人間科学の成果を取り上げるものであり、その主題は、認識論、言語論、絵画論、文明論、他者論、ジェンダー論など多岐に渡っている。しかし、この講義はさまざまな事情から、講義録が1988年に出版されたあとも主題的な考察の対象になることは少なかった。

ソルボンヌ講義は哲学の講座ではないが、メルロ=ポンティがこの講義を他ならぬ哲学者の立場から行なっていることは注目すべきことである。というのも、メルロ=ポンティはこの時期、哲学と人間科学は、互いに排除ないし対立し合う分野ではなく、互いに包摂し合う関係にあると主張しており、それゆえ、彼はこの講義を通じて人間科学と哲学の対話を試みていた、とすることができるからである。

本シンポジウムの目的は、そのようなメルロ=ポンティの学問的態度に立ち返り、彼の哲学を、現代の発達心理学や教育学の成果と接触させることである。そのような試みは、ともすれば古典的テキストの読解に終始しがちな今日の現象学研究をもう一度生きられる世界へと向かわせ、メルロ=ポンティの発想を今日どのように生かすのかを改めて考える契機になるだろう。

本サークルからは酒井麻依子が登壇し、ソルボンヌ講義の概要や、そこでの人間科学と哲学の関わりといったメルロ=ポンティの議論を紹介する。奥井遼氏には教育学の立場から、現代サーカスにおける身体技法・「わざ」の伝達と習得、そしてその際の身体経験の変化について論じていただき、山口真美氏には発達心理学の立場から、言語獲得以前の乳児がどのように世界を知覚しているかについて、視覚科学・脳科学に基づく最新の知見をご紹介いただく。

酒井麻依子

「人間の科学」とメルロ=ポンティの哲学

酒井麻依子（筑波大学）

ソルボンヌ講義の頃のメルロ=ポンティは、哲学というものを、さまざまな偶然的事実の集積の中にそれらを一貫し統一する合理性を見出す運動として、言い換えれば、「無意味」の中に「意味」を見出す運動として規定している。その上で彼は、人間科学の研究者たちも、収集された諸事実には何かの「意味」を見出そうとする限りにおいて、一種の哲学を行なっていると主張する。彼によれば、自分自身を真理の最終的ないし特権的な審判者として考えがちな哲学者たちも、他の学問分野の研究成果を無視するわけにはいかない。むしろ哲学者の役割は、他分野の研究者たちがこの世界について見出した意味を検討し、その含意を明確化することであるとされる。

本発表では、このようなメルロ=ポンティの学問論を参照しつつ、彼がソルボンヌ講義の主題である児童心理学と教育学をどのように捉えていたかを紹介する。彼は、二つの分野に共通する、もはや子供ではない大人が子供という「他者」を観察し、研究するという課題に不可避免的に伴う困難を指摘している。そして、この困難は、立場や力が等しくない者たちの間に観察者 - 被観察者という関係が築かれる際に一般に生じる困難であり、その点で子供についての科学だけではなく、広く人間についての科学全般に当てはまるものであるとされる。

ここで紹介する人間科学における観察者 - 被観察者の関係という問題は、実のところ彼の他者論と深く結びついている。その主要な論点を検討することで、今日メルロ=ポンティを読むことの意義は何か、ということについて考察したい。

わざの習得とコミュニケーション

奥井 遼 (同志社大学)

わざの習得を促すコミュニケーションは、言葉と身ぶりが分かちがたく結びついた多層的な成り立ちをしており、かつ教え手と学び手の間で相互的に形成されている。指導の言葉は、たしかに「教え手」から「学び手」へと伝えられることが多い。しかしながら、その相互性を支えているのは、身体が織りなすやり取りであり、言葉として定式化されるよりも以前に、言葉の定式化を可能にするような仕方で働いている。こうしたコミュニケーションは、個人の存在に先立つ、あるいはそこから個人が分化してくるような原初的領野である。

本発表では、フランス国立サーカス学校の稽古において、生徒がアクロバットなわざを成功させるまでの教師—生徒のコミュニケーションの事例を記述する。その際、メルロ=ポンティの概念を借り受けることで、フィールドで起きていることを理解するとともに、メルロ=ポンティに対して問いを投げ返すことを目指す。現代サーカスとは、伝統的なサーカスの技法を受け継ぎ、演劇、ダンス、音楽などの諸分野と交流しながら発展してきた総合身体芸術である。

生徒にとって新しいわざとは、世界の新たな意味を獲得するための跳躍台でもあるが、同時に、それまでに構築した世界との関わりを破壊する契機でもある。コミュニケーションの紆余曲折をつぶさに観察することで、変容しつつある身体経験の一端を明らかにすることができるだろう。

Pre-constancy vision in infants——乳児の視覚世界の謎に迫る

山口真美 (中央大学)

私たちは乳児の知覚世界が成人のそれとどのように異なるのかを示すべく、“pre-constancy vision”を提案している。生後3ヶ月頃の乳児はいわゆる「知覚の恒常性」を持たないため、興味深い現象を提示する。

彼らは成人が気づくような物体の材質の変化に気づかず、むしろ成人が気づくことのできない照明環境の変化に気づく。我々の一連の実験により生後3ヶ月の乳児が“pre-constancy vision”であることを示すことができた。

また、成人は動いている物体を見るとき、物体のサイズが大きくなるほど運動方向の知覚が難しくなるという、一見すると直観に反するような現象がみられる。これは「周辺抑制」という、視覚を処理する神経細胞が持つ抑制メカニズムを反映した知覚的現象であると考えられる。我々の研究では、生後3ヶ月の乳児と老人は、この周辺抑制が機能せず、成人とは逆に大きいサイズの運動方向の感度がよいという結果を提示した。

さらに我々の脳計測研究からは、言語獲得前の生後7ヶ月の乳児に成人と同様、カテゴリーカル色知覚を示す脳活動を示すことに成功した。この活動は色カテゴリーの座位でもある側頭にもみられ、色の言語カテゴリーを学習する前に、カテゴリーカル色知覚を獲得していることを示すものである。

以上、我々の研究室で行ってきた乳児を対象とした視覚実験から、言語獲得以前の乳児がどのように世界を知覚しているかについて、視覚科学・脳科学に基づいた最新の知見を紹介したい。

Nakashima, Y., Yamaguchi, M. K., & Kanazawa, S. (2019). Development of center-surround suppression in infant motion processing. *Current Biology*, 29, 3059-3064.

Yang, J., Kanazawa, S., Yamaguchi, M.K., & Kuriki, I. (2016). Cortical response to categorical color perception in infants investigated by near-infrared spectroscopy. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*. 113(9), 2370-2375.

Yang, J., Kanazawa, S., Yamaguchi, M.K., & Motoyoshi, I. (2015). Pre-constancy vision in infants, *Current Biology*. 25(24), 3209-3212.

https://rad-it21.com/サイエンス/yamaguchi-masami_20200319/